備北ナカポツだより

BIHOKU NAKAPOTSU NEWS
No.38
令和5年
3月1日発行

●発行所／三次市十日市東三丁目14-1三次市福祉保健センター1F　TEL.(0824)63-1896　FAX.(0824)63-1897
一般社団法人備北地域生活支援協会　備北障害者就業・生活支援センター
http://care-net.biz/34/bihoku-c/　E-mail／info@bihokucenter.com

「ナカポツ」は障害者就業・生活支援センターの通称名です。

職場拝見

今回は、三次市内で高齢者に対する様々な福祉サービスを展開している社会福祉法人慈照会を訪問して、宮武事務長にお話を伺いました。

宮武事務長

慈照会の設立の経緯を教えてください

三次市内にある法正寺の住職だった和泉慧雲（えうん）が昭和48年10月に法人を設立しました。

前年の昭和47年7月に西日本を中心に豪雨災害があり、三次市の中心部はほとんどが水没しました。この災害によって多くの人が家を失い、高齢者の中にはこれからの生活に大きな不安を抱く人も少なくありませんでした。

こうした高齢者が安心して暮らせる場所を作ろうと考え、最初に養護老人ホームを立ち上げました。

慈照会の経営理念は「一人子の命をまもる母のように人はすべてのものに対して限りなき慈悲心をいだかねばならない」（仏典より）であり、いたわりと愛情をもって利用者の方々と接し、心身共に安心して日々を過ごしていただけることを目指しています。

法人が運営する施設の内容について教えてください

養護老人ホームのほか、特別養護老人ホームやケアハウス、グループホームなどの入所サービス、訪問介護や短期入所、通所介護などの在宅サービスを含め、高齢者に対する福祉サービスのすべてを提供する法人となっています。

また、隣接する医療法人微風会では老人保健施設や病院などを運営しており、この医療法人と連携することにより、介護と医療の両面から高齢者に対するサービスの提供を行っています。

慈照会での障害者雇用の状況について教えてください

慈照会では現在、5名の障害者が働いています。仕事の内容は看護職、介護職、介護助手などです。最近まで7名の職員がいましたが、退職されたため、法定雇用率を達成していない状況となっています。

障害者雇用をするきっかけがあれば教えてください

きっかけは市内の高校から高次脳機能障害のある実習生を受け入れたことでした。それまで、色々な高齢者と接する介護の仕事は障害者には難しいのではないかと思っていましたが、実習を見ている中で、周りのサポートがあればできる作業がたくさんあると思いました。

介護の職場は慢性的な人員不足になっています。介護職をサポートする人材として障害者の雇用を積極的に進めることとしています。

施設外観

障害者を雇用している中で、配慮されていることがあれば教えてください

慈照会では、介護職の他にも色々な職種があります。そのため、障害者の特性に合った仕事に就いてもらうことが可能です。また、法人本部は三次市街から車で15分の場所にあり、公共交通機関もありません。そこで、三次駅から施設までの往復バスを運行して、車での通勤ができない人に利用してもらっています。また、職場内で障害に対する理解を深める研修も実施しています。

（次頁へつづく）

（前頁より）

障害者を雇用しての感想を教えてください

初めての就職先が慈照会だった方がおられますが、その方がとてもポジティブで、仕事ができることへの感謝と喜びの気持ちが職員にも影響して、活気あふれる職場となっているケースがあり、採用してよかったと思っています。

また、就職された後に検査などで障害があることが分かり、周囲がその障害を理解するのに時間がかかったことがありました。今では、障害の内容を周りが理解し、順調に仕事を続けておられますが、見た目ではわからない障害に対してどのように対応すればよいか悩むこともあります。

今後の障害者雇用の計画等があれば教えてください

法定雇用率を達成していないこともあり、3名から4名の障害者の雇用を考えています。その人に合う仕事や、その人が通勤しやすい職場について配慮したいと思っています。

ナカポツに対する要望があれば教えてください

以前、精神障害のある人を雇用した際、途中でよく休むようになり、結局は退職されました。この人はナカポツとの関わりがありませんでしたが、こうしたケースの場合、本人の気持ちを第三者の立場でナカポツに聞いてもらっていれば、辞めずに済んだかもしれません。

ナカポツには障害者と雇用主（上司や先輩など）との間に入ってもらって、色々な仲立ちをしてもらえる架け橋になってもらえればと思っています。

また、ナカポツが主催する研修会や交流会にはこれからも参加したいと思いますので、継続した取り組みをお願いします。

ありがとうございました。

私たち羽ばたいています!

北野 有起帆さん

慈照会に就職したきっかけを教えてください

高校のインターンシップで、担当教諭から慈照会を提案していただき、十日市慈照園（通所介護・訪問介護自立支援型グループホーム）で実習をした経験がきっかけです。利用者の方々とお話をした時に「自分のやりたい仕事はこれだ!!」と、ときめきを覚えました。

仕事の内容を教えてください

ご利用者の朝のお出迎えや飲み物の準備等をしています。また、廊下等の清掃や除菌をしています。

就職して3年になりますが、長く勤められる理由を教えてください

十日市慈照園だから安心して働くことができています。

所長をはじめ職場の皆さんが自分の特性を考慮して、話を聞いただけではすぐに理解できないので大切なことはメモを渡してくださるなど、働きやすくなるよう配慮してくださっています。

就職前に職場実習をしたことも入社前に安心できたので良かったです。

体操を主導する北野さん

仕事を継続するためのコツを教えてください

体調管理にとても気を使っています。また、仕事に行く前に「自分で自分にご褒美をあげたい」と思い、好きなテレビ番組などを思い浮かべ、それを楽しみに仕事をしています。

今後の目標を教えてください

利用者全員にコミュニケーションがとれるよう成長することです。まだまだ緊張するので、心に余裕が持てるように日々経験を重ねていきたいです。

ご両親にもお話を伺いました。

就労継続のために家族がサポートされていることを教えてください

規則正しい生活を維持するようにしています。

余暇の過ごし方も大切だと考えており、気分転換のために娘が休みの日は家族でドライブに出かけています。

北野さんファミリー

将来、社会に出るために家庭で何かしてこられましたか?

知り合いや学校の先生方などから多くの助言があって今があることを娘に話してきました。これまでの出会いに感謝しています。

障害者手帳を取得したことについて、幼少期に取得することもできましたが、我が家の場合は本人の選択肢として残すことにしました。就職活動の段階で障害者雇用での就職を決めた際に障害者手帳を取得しました。

ナカポツへの要望があればお聞かせください

障害のある方は情報弱者であると常々感じています。多くの情報が発信されている中で、障害者自身が自分に必要な情報を把握する力が弱いこともあると思います。引き続き色々な情報を届けていただきたいと思います。

ありがとうございました。

この人に聞きました。

三次市内で障害福祉サービスを提供している一般社団法人「結」の代表理事、水越ひろ子さんにお話を聞きました。

水越ひろ子さん

水越さんの障害福祉との関わりについて教えてください

最初の関わりは中学生の時です。同じクラスにてんかんと重度の知的障害のある生徒がいました。彼は周りからどんなひどい言葉をかけられても、いつもニコニコしていました。みんなといることがうれしかったのか、いじめられていること自体が理解できなかったのか、今となってはわかりませんが、その光景を見て「障害のある人をいじめている側が変わるべきだ」と強く思いました。

その後、高校に進学して庄原市にあるさくら学園の学園祭のボランティアに行った時も、生徒の皆さんの笑顔に接して、将来は福祉の仕事に就きたいとの思いが一層強くなりました。

こうした思いで高校卒業後は保育士と社会福祉主事の資格が同時に取れる専門学校へ進学しました。

専門学校を卒業された後はどうされましたか？

学校を卒業してすぐに結婚、出産して10年間は専業主婦をしていました。

子育てが落ち着いたとき、三次市にある重度障害者入所施設の子鹿学園（現・子鹿医療療育センター）に就職しました。

子鹿学園には何か縁があったのですか？

専門学校の時の実習先の一つとして子鹿学園に2週間お世話になりました。そのとき、施設の利用者と職員との関係がとてもアットホームだったことが好印象で、就職を決めました。

「結」を立ち上げられた経緯は何ですか？

子鹿学園に勤務していた時、保護者から色々な相談を受けていました。障害があるということで、子育てに悩む保護者もたくさんおられました。日々様々な困りごとがあるわけですが、その困りごとに柔軟に応えていくために、自分でできることがあるのではないかと考え、一般社団法人「結」を立ち上げました。

結では「児童発達支援」「日中一時支援」「放課後等デイサービス」の3種類の障害福祉サービスを提供しています。

水越さんは発達障害に関心があると伺っていますが…？

「結」の利用者の中には発達障害のある人も多くいます。その人たちが社会で安心して生活していくためには、その当事者が変わるのではなく、社会が変わっていかなければならないと思っています。その取り組みとして、発達障害や知的障害に対する理解を深めていただくための福祉サービス従事者養成研修の講師を年間30回程度務めています。

水越さんは広島県中小企業家同友会に入会されていると聞いていますが…？

県北には同友会の組織がないので、広島市内の支部に所属しています。私は障害児(者)の福祉サービスに携わっていますが、まずは自分の運営する職場が働きやすい環境でなくてはならないと思い、ある人に相談したところ「自分でその答えを出すことが必要だ。そうした勉強の場が同友会にはある」と言われ、入会することにしました。

現在、県北の26の企業が集まって、今年の6月に支部（備北特別地区会）を発足させる準備をしています。発足当初には50社の加入を目標に取り組んでいます。

同友会には障害者問題委員会がありますが、今後の関わりについて教えてください

「障害者問題委員会」という名称には少し違和感があり、もっと前向きな名称へ変える提案をしています。全国組織でもあり、すぐに改名できる状況ではありませんが、備北地域でもこの委員会の活動は進めたいと考えています。

具体的には特別支援学校の先生方に企業を訪問してもらい、企業の障害者雇用の実態を見てもらう取り組みを考えています。

ナカポツとしてこの同友会へ関わることは可能ですか？

備北地域での障害者雇用に関する情報をナカポツから発信してもらいたいと考えています。

三次市や庄原市の現状は少子高齢化で人口減少も顕著です。このままでは、人手不足で事業を継続できない企業も増えてくると思います。

そうした中で、障害のある人もどんどん仕事に就いてもらえる環境づくりをしたいと思っています。

障害があっても、ちょっとした配慮をすることで、健常者と同じように働ける人が私の身近にもたくさんいます。企業の力を結集して、障害のある人の力を生かす取り組みにナカポツも協力してもらいたいと思います。

ありがとうございました。

お知らせ

令和4年度 第3回 就活支援交流会報告

「仕事に就きたいけど、なかなかその気になれない…」「まわりの人とうまく仕事ができるか不安…」など、就職するため、働き続けるためのいろいろな心配事や不安を話し合う交流会を２月４日（土）に開催しました。

当日は小谷さゆりさんを迎え『「うつ」と診断されて…～私が歩んだ社会復帰の道のり～』と題してトークセッションを行い、その後に２つのグループにわかれて話し合いを持ちました。

小谷さんから「発病したときの仕事や家族の様子」「入院治療中の思いや不安」「回復後の就職活動で考えたこと」「仕事を続けていくためのポイント」などについてお話がありました。

また、グループワークでは小谷さんのお話を聞いて感じたことや自分との対比、仕事を続けるためにはどうしたら良いか、求職活動について話し合いがされました。

参加された方からは「自分のできないこと（障害特性）を知ってもらい、働きやすい環境を自ら作っていくことは大切」「障害者の立場でいろいろな人の話が聞けて良かった」「自分と同じところが見えたので共感が持てた」などの声をいただきました。

来年度もテーマを決めて交流会を開催したいと考えています。関係者の皆様のご参加をよろしくお願いします。

障害者雇用企業等担当者交流会を開催しました

12月2日（金）に三次市福祉保健センターで、障害者を雇用されている企業や今後の雇用を検討されている企業から10名の方にご参加いただき、広島障害者職業センターと共催で交流会を開催しました。

「障害者雇用とその継続に向けて必要な準備について考える」をテーマに、グループ討議（各企業の障害者雇用の実態や意見交換）を行いました。

何をどこまで配慮すべきか…と企業は戸惑いがある中で、面接の段階で障害者自身が自分の障害について説明することで企業の不安が軽減する。また、自分を客観視できることは障害者自身の就労継続に繋がる等の意見が出されました。

参加者から「他社の意見が参考になった」「他社の実態を知る良い機会になった」などの感想をいただきました。

センター活動実績

〈令和4年10月17日現在〉

●**就職者数 460件**(H22年4月から累計)

●**企業実習 311件**(H22年4月から累計)

職種　就職先：食品製造、製造業、福祉施設、運送業、病院、日用品販売量販店、農業、建設業 etc

編集後記

発達障害のある方から『リエゾンーこどものこころ診療所ー』という漫画があることを教えられ、読んでみました。（テレビドラマも放映されています。）

発達障害のある精神科医と研修医が、様々な生きづらさを抱えた子どもたちと接するというストーリーで、家族との関係や周囲との関わりなど、私たちが発達障害とどのように向き合えばよいのかが分かりやすく描かれています。

小中学生の8・8％に何らかの発達障害があると言われる現在、その子どもたちが安心した生活を送るためには、その特性を否定するのではなく、認めることが大切ではないでしょうか。

この漫画を見る中で「常識」の反対語は「非常識」ではなく「常識にとらわれない」ということではないかと考えるようになりました。

皆様も機会があれば是非読んでみてください。